

磯の香

創刊号



東京上磯会
会報
創刊号

会報の発刊に寄せて

東京上磯会 会長 相馬 正樹



自然保護を叫ぶ人たちは、そこに住んで自然とともに生活している人ではなく、自然を破壊して住んでいる都会人であるように、雪を美しいものと見るのは旅人の目で、雪に恨みをこめて見るのは雪の中に住む人の実感である。ふるさとに生まれ育ち、そこに住みついている人にとっては、ふるさと

に対する郷愁などは無縁のことに違いない。
郷愁とは、ふるさとを遠く離れてみて初めて実感することなのである。ましてや、無常のドラの音に未練のテープを切られた連絡船の別れの思い出をもつ戦前派にとつては、現在のように気軽に帰省できなかつたこともあって、その郷愁には一入なものがある。

しかし、老若の差こそあれサケの母川回帰の本能のように、われわれ人間のふるさとに対する郷愁は、すべての生物に共通する本能として潜在しているのは確かかなようです。

このたびの会報の発行は、このようなふるさとに熱い想いをよせる会員を結ぶ絆として、会員相互ならびにふるさととの情報の交換を図り、上磯会の求心力としての役割を果たしたいとの念願から企画されたものであります。

したがって編集の目標は、会員からの寄稿を縦糸に、ふるさとの皆さんからの音信を横糸にし、これに日ごろたしなんでおられるスポーツや趣味などを織込んで、鮮やかな錦に仕上げようとするところにあります。

ともあれ、東京上磯会の会報を魅力あるものとするために、今後のみなさまの積極的な参加と御協力をお願いすると共に、この会報が会の発展の力強い推進力となることを期待して止みません。



創立総会で挨拶する相馬会長

於・お茶の水 ホテル聚楽 平成7年2月25日

ふるさとへの「応援歌」を

……東京上磯会・会報発刊によせて……

上磯町長 海老沢 順三



東京上磯会会報の発刊に当たり、一言お祝いを申し上げます。

「ふるさと」という言葉には、なぜかしら甘酸っぱい匂いがあるように思えます。かの有名な詩人石川啄木は「石もて追はるることく」漁民の地を離れ、二度と故郷に戻ることはありませんでした。しかし、啄木は「ふるさとの山に向かひて言うことなし ふるさとの山はありがたきかな」と愛憎相半ばする想いを込めて、ふるさとを謳いあげたといえます。

昭和三十年、茂別村と合併し、現在の姿になった上磯町は、その当時の人口約二万六千人が、今日の三万四千人までに増え続けるなど、大きく発展して参りました。また、古くから基幹産業として町の経済を支えてきたセメント工場は、いまも変わらず鈍音を響かせ、さらに農業、漁業といった一次産業も伝統を受け継ぎながらも、新しい取組みが見られるようになっていきます。

私は昭和五十年に初当選させていただき、「町民参加の行政、思いやりのある公平・公正な行政」を私の政治哲学とし、今日まで上磯町発展のために誠心誠意、町政の舵取りに挑んで参りました。今後も「ふれあい創る田園工業都市かみいそ」を行政テーマとし、新産業の誘致育成や高齢化時代に対応した地域福祉の充実など、新たな行政課題に取り組むとともに、皆様の幼き頃の記憶に残るかけがえのない海やみどりをいつまでも大切に作る町づくりを積極的に進める考えでおります。

さて、昨年は二度にわたり皆様と東京でお会いできる機会に恵まれ、その元気なお姿を拝見することができました。記念すべき十月七日の創立総会に至るまで、相馬会長さんをはじめ、大勢の方がご尽力されたと同様であり、その熱意と皆様から直接頂戴した純粋な望郷の思いは、今も私の胸にしっかりと刻まれております。

申すまでもなく、東京は世界に冠たる国際都市であり、わが国の政治、経済、文化の中心地でもあります。その地から遠く離れたふるさとを思う皆様のお気持ちは、いま上磯に住む私たちにとって何よりも代えがたい応援歌に聞こえてくるのです。

いま東京上磯会は、相馬会長さんをはじめ二十名の幹事さんを中心に、会員相互の親睦を深められる活動をされていると伺っており、この会報もその一つとして、この度発刊されることは大変喜ばしいことだと思っております。どうぞ、皆様の和を大切にされた中에서도、今後とも東京からふるさと上磯へ大きなエールを送っていただきたいと思えます。

私も三万四千町民とともに、皆様の足跡が残るこの町の発展のために、一層努力することをお誓いするとともに、貴会の益々の発展をご祈念し、会報発刊にあたってのご挨拶とさせていただきます。

東京上磯会「創立総会」のつどい

東京に函館を中心にして渡島半島の出身者で東京近郊に在住する人たちが組織する「北海道道南会」というふるさと会があります。

私とその会員として出席しているうちに、数名の上磯の出身者に会う機会がありました。二度とその会に顔を出さない人が多いのに気が付きました。それは、多数の函館の方たちに圧倒され寂しい思いをするからではないかと思ひ、上磯出身者だけの会をつくることを思い立ったのが、上磯会の創立の動機でした。

早速身近な人たちと相談して在住者の情報を集めたら、二百人ぐらいいなり、昨年二月二十五日発会式を開催しました。せいぜい二割ぐらいの出席を当て込んでいたところが、みなさんが友人、知己を誘い合わせたお陰で、百三十六名の参加者があり大盛会でした。

これに気を良くして、十月七日に創立総会を開催し正式に「東京上磯会」として孤々の声をあげる運びになったのです。

この日は上磯からは町長をはじめ町の職員ならびに町の有志数名が出席され、発会式と同数ぐらいの参加があり盛会でした。小学校卒業以来の再会を喜ぶ声があちこちに起こり、また意外な出会いに驚く顔が交錯して同郷ならではの和やかな雰囲気になりました。

また、上磯出身の芸能人の華やかなアトラクションが花を添え、限られた時間に名残を惜しんで散会し、二次会に急ぐグループも多かったようです。

出席の来賓および多くの方々の声援を得て、上磯会の発展に大きな弾みがついた総会でした。

(相馬 記)

第一回総会経過報告

参加状況

	総会	発会式
総会案内発送数	359名	250名
出席の回答	118名(32%)	129名(51%)
出席者	104名(欠席14名)	122名(欠席7名)
来賓	6名	12名

出席回答者地域別概要

当別	21名(18%)
茂辺地	11名(9%)
谷川	14名(11%)
上磯	62名(52%)
浜分	5名(4%)
峯朗	5名(4%)
計	118名

ふるさとを憶う

ふるさとの花

篠崎 哲子

今年も桜の季節がやって来て、お花見をしないうちに早々と北へ去ってしまいました。

学校、社会へと出発するいきいきとした表情の若い人を、街と電車でも多く見かけるようになり、いつも思い出すのは上磯小学校での初めての遠足、盛りと咲くトンネルの下を行く清川陣屋です。あの頃から老木が多かったと記憶していますが、今も花のにぎわいを見せているのでしょうか。私の父は上磯であれば、海の幸、山の幸に恵まれ、子供達の生長に助かるであろうと、小さな薬種商を母に残して、この世を去っていったと聞かされています。

母は、何事があっても「明日は明日の風が吹く、さあ今夜はぐっすり眠りましょう」と明るく生きる人でした。隣り近所の方々の親切な人情、海山川にかこまれて、元気に遊び育った子供の頃の環境。ふるさとに感謝しております。



短い夏、真っ黒になって泳ぎ、腹這いになって休む浜辺のぬくもり、男の子とバツタを追いかけたハマナス、月見草の咲く砂山。スカート裾に小さな氷がつく程滑ったスケート。海沿いの長い町と多かった神社、寺、忠魂碑、お祭りの灯とにぎわい。小学校の六年間は熱心な先生方と友達等々。

今は身内も誰もいませんが、近所の方と文通をしております。又訪れることを楽しみにしています。

(旧姓 井上 川崎市在住)

思い出の谷川小学校

高橋 照美

いつも心の奥には、あのなつかしい川、山や海、町並みがあります。長い道のりの通学路、学校の近くに渡っているヨレヨレの木の橋。真ん中に穴が開いていたから上からよくのぞいて川の流れをながめた。雪が降るとツルツルすべって歩けないので、ゴム靴にワラを巻いてそっと渡った橋。冬は馬そりの後ろにつかまり竹すべりでスイスイ、おじさんの目をぬすんでは時々「こら！」としかられた。

夏の学校の帰り道はのんびりと素足になって海づたいに波うちぎわを歩いて帰る毎日、勉強なんてしたかしら……。時々ガキ大将にいじわる通せんぼされてよく泣かされた。お昼のお弁当は裏の川のそばで立石先生とみんな楽しんで思い出。

古い校舎の廊下は所々床がはずれていて、ゆさゆさとトランポリンのようにはずんでいる。楽しかった遠足はちよつと怖かった火事とミックスされました。冬にむけて全校あげての富川神社まで山へしばかりに、色々思いついても楽しくなつかしきで胸がいっぱいになります。古き良き時代でしようか。

(旧姓 小野寺)

ふるさとの魅力は安心感

相馬 正樹

定年になって暇ができると、ふと「終の住家」をどこにしたら良いだろうかと考えることがある。このとき真っ先に浮かんでくるのは「ふるさと」である。退職金で故郷に豪邸でも建てて住もうかと老妻にさぐりを入れてみると「あなた一人帰ったら」とつれない反応しか返ってこない。こんな時しみじみ同郷の妻だったら二つ返事で喜ぶだろうにと、妻を現地調達したことを後悔する。

日本で越冬するアジアの渡り鳥は、シベリアで繁殖して子育てのために温暖な地を求めて日本に渡ってくる。しかし、ここには決して永住することはない、必ず酷寒のふるさとに帰って行く。この理由は餌に関係があるが、もうひとつの理由は外敵から身を守る湿地があるし、猛獣が少ないからで、子育ての安心感が寒さに優先する大事な要件となっている。

人間の場合はもう少し複雑だが、生まれ育ったふるさとには、住み慣れ

ることによって得られる安心感は他の野生動物と変わりはないし、ふるさとを離れて生活する他郷は鳥で言えば越冬地に例えられよう。ここがどんなに住み慣れても、不安とは言えないまでも、生まれ故郷のような本物の気楽さや安堵感には浸れない。それは、大都会でポット出の田舎者が初めにうけたカルチュアショックが尾をひいていて、そこはかといない違和感によるものかも知れない。これがふるさとへの郷愁へとつながり「終の住家」への発想を揺り動かす震源になるに違いない。

長年アメリカに住んで、言葉も習慣もすっかり身につけてしまったようでも、ドアに手を挟まれた途端に「イティツ！」と叫んでしまうようでは、まだアメリカ人になりきっていないと言われる。これが自然に英語で出るようにならない限りはいつまでも日本人で、望郷の念から解放されないし、老後になってふるさとに住家を求める夢を追い続けることになるのだろう。

(神奈川県逗子市 在住)

「故郷」

井上 稔



「故郷」という言葉を聞くと、自然に心がなごんでくる。私が上磯に住んだ期間は、高校卒業までの十八年間である。分別のつかない幼児時代を経て、物心がついた時には、日本が戦争に突入し、そして敗戦（中学二年）、戦後の食料難時代と続き、上磯に住んでいた頃の思い出は、「四六時中腹を空かしていた」ことである。

そうした意味では、サラリーマン時代に過ごしたデュッセルドルフ（ドイツ）の八年間、ニューヨークの四年間の方が揺かくて強烈で新鮮な印象／思い出が残っているが、やはり上磯と聞くと、両親、兄弟と楽しく過ごした日々、函館までの汽車通学を共にした学友、「明友」という野球チームを作り、町の大会で並み居る強豪、特に日本セメントチームを破って優勝したことなど、懐かしい思い出が尽きない。

東京上磯会にはまだ出席の機会がないが、会員が六〇〇名とのことで、これだけの会員を集め、立派に運営されている相馬会長に、心から敬意を表したい。今後同会の益々の御発展をお祈り申し上げると共に、次回は

「ふるさとの感傷」

井村 司



「ふるさと」という語にはもともと感傷的な響きがある。「うさぎ追いかの山」の唱歌の世界がそこにある。僕もご他聞にもれず「ふるさと」と聞くと少なからずセンチメンタルな気分になる。

年に一、二回上磯に帰る。今年も三月に帰った。八十歳をとうに越した母が、お弁当持ちでゲートボールに行ってきたと言いつつ、疲れの色を全然見せないで戻ってきたのに驚いたり、安心したりした。僕も三日続けてゴルフをしてもバテないと周囲の者からあきれられるが、これも母の体質を受け継いだせいだろう。母の顔を眺めながら、母の不思議、遺伝の不思議を思った。

今年の冬は雪が多かったとかでもと小振りな父のお墓は下半分が隠れていて、余計に小さく見えた。父は四十八歳で亡くなった。自分が父の年齢を越してから、四十八歳という若さで死んだ父の無念さが思われて哀れを覚えるようになった。墓前に立つといつも、親父の分まで生きてやろうと思う一方、何時の日にかここで父に再会出来るのだと思うと、死に対する怖さが半減するような気になせられるのが不思議だ。

お墓のある東光寺を出て、海辺に行ってみた。よく晴れていて真正面に函館山を置いた巴の海が美しかった。沢山のカモメが乱舞していた。振り返ると、遠くに真っ白な騎ヶ兵が見えた。西の空にセメント会社の煙突が聳えていた。日頃カラオケバーの酒に酔い望郷の演歌を唸りながら思い出しているふるさとの景色がそこにあった。

僕にとって「ふるさと」とは老いた母がいて、父のお墓があつて、懐かしい景色のある所だ。本当は幼なじみの友達がいくらでもいる筈なのだが、その多くと永年の無沙汰で交友が途切れてしまっているのがびどく寂しい。自分の不徳の故なのだが、今度生まれた「東京上磯会」が昔の友達とのつきあいを呼び戻すきっかけになってくれたら本当に有り難いと思う。

(横浜市 在住)

「上磯弁」を聞きに是非出席したいと思っております。
(神奈川県鎌倉市 在住)

故郷の自然を想う

山下 勇吉

上磯町は他市町村の年配の方々に言わせると、北海道でも有数の公害の街だと言われて来ました。なぜかと申しますと「セメントの粉が降る街だから」だそうである。私も汽車通学で夜少し遅い時間に帰る時、年に数度粉に降られた事があります。しかし、当時私は函館や他町村から来ている同級生に必ず反論し、決まって言う言葉は「セメントの粉は肺結核で肺に穴のあいた人は治るし、屋根、トタンなんか函館のトタンが錆でポロポロになっても、上磯の屋根は何十倍も丈夫で長持ちし喜んでゐるんだ」と言つたものです。

昔はカラートタンが無く、せいぜい錆止めペイントを塗るか只自然にまかせ、穴があき雨漏りがして屋根のふき替えというパターンだったと異います。それが降り積もつたセメントの粉が防錆の役目を果たして、当時の経済状態を考えますと非常に助かつたのではないかと思ひます。

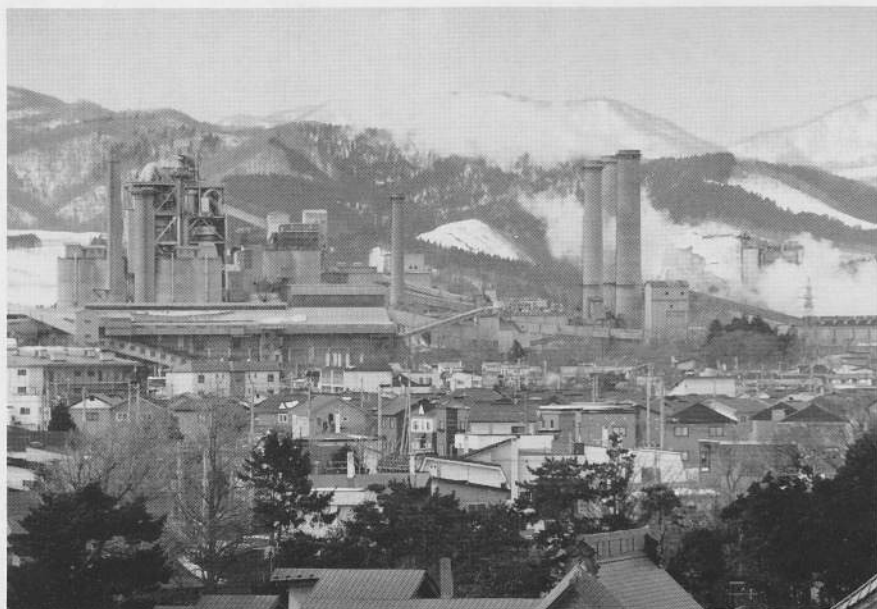
上磯と言へばセメントという代名詞があるのが故郷は、セメントの原料も豊富で「水無」から「莪朗」の奥、清川の「雷電山」まで石灰岩の山が続き、その水脈の源は有名な「釜の仙峡」で湧出するものと「水無」の湧水として、どこの名水にも負けない素晴らしい水がすぐ道路の側から湧出して、真夏の外気温が二十七、八度の時でも七、八度であり、湧元に手を入れて一分我慢した人はお目にかかつた事はありません。昨年夏に渡島保健所に水質検査を依頼し、飲料水として最適という分析結果が出ております。私はゴルフデンウィークとお盆には必ず車に積めるだけ水を持って東京に帰ります。昨年は出張も多く使用量が少なかつたせいも、まだ一〇リットルぐらい残っておりますが、不純物が入っていないので変質することなく、現在でも飲んでおります。

昨年の夏は、海老沢町長の兄上である海老沢医院院長・健二先生御夫妻と、八月十五日湧水前で、川で獲つたイワナやアメマス、ヤマメなどを食う会を行いました。あいにくの雨で中断（半日）しましかが、毎年の楽しい行事であり、今年も実施する予定です。

水清く緑豊かな上磯は、動物ではヒグマ、エゾシカ、キツネ、ムジナ（穴熊）、テン、野ウサギ、カッコウ、ヨシキリ、シギなど、また山中にはクマガラ、アカゲラ、アオゲラ、ミヤマカケス、全身真っ赤なナンバン鳥など珍しい鳥類、春には山菜、夏から秋にかけては、何十種類もの「きのこ」、海ではホッキ貝、イワシ、カレイ類、アブラコ、ソイ、サケなど数え上げ

ればきりがない程豊富な魚介類が水揚げされます。今一度故郷の自然を見直して戴きたいと思ひます。

(東京都江戸川区 在住)



「めぐり逢い」

佐々木 紀昭

思いも寄らない場所で、思いも寄らぬ人と出会う。こんなめぐり合いを誰もが経験したことがあるのではないだろうか。今日は、私と上磯の人との不思議なめぐり合いをいくつかここに紹介してみようと思う。

まず、めぐり合いで思い出されるのは、上中で同級だった小田島洋助氏との大都會での再会である。私は、中学三年（昭和三十年）の春に、父の転勤のため青森市へ転勤したが、これを機に同級生との連絡がほとんど途絶えてしまった。それから十年途りが経ち、社会人として生活を始めた夏のある日、私は暑さから逃れるように乗り込んだ山手線の中に、何とも気に掛かる青年の顔を見つけた。それはいつかどこかで見たことのある顔に違いなかった。

私は、一生懸命記憶の糸を手繰ろうと努力してみたが、これと言って思い出せないでいるうちに、電車は目的地である新宿駅に到達しようとしていた。仕方なく降りようと立ち上がった。とそのとき、名前の分からぬ青年が今度は私の顔をもの言いたげに見るのである。お互いの何ともしようのないまま、出口へむかうことになった。電車の扉が開くと同時に口を開いた。「あの……」。ホームに降りてそれぞれの名前を名乗り、互いを確認し合うと我々は十年以上も前の上磯の同級同士であった。東京という大都會の雑踏の中の偶然の出逢いに私は、夏の暑さを一瞬忘れてしまった。そしてその再会から三十年ほど過ぎて、昨年二月に開かれた上磯会では、残念ながら同氏とは逢うことはできなかったが、私の勤務先で上磯のことを話題にしていたら、なんと同氏の妹さんのお嬢さんが、同じ会社に就職していることが分かった。たび重なるめぐり逢いに、私はただただ驚くしかなかった。

もう一つ私にはどうしても忘れられない出逢いがある。それは増井邦雄氏とのめぐり逢いだ。同氏は昭和二十八年頃、東京から上磯に来られ、数年してまた東京へ戻られたと私は記憶している。私より一、二年先輩で、広い庭付きの大きな二階建ての家に住んでいる。二階にあった卓球台を使って子供にも夢中で卓球したことを覚えている。当時内地の人、それも東京の人と言えば、上磯ツ子と違い、その言葉に、そのセンスに憧れたものである。ほんの数年の間だが、私はそんな都會の匂いが感じられる同氏と共に過ごした日々のことを、いつまでも懐かしい思い出となりいつの日か逢いたいと思った。

何年前か前、同氏のお父様がなくなられた記事を新聞で読んだ時なども、私の脳裏にあった同氏への再会の熱望がさらに深まった。そして二回目の上磯会で思いも寄らず「東京の人」と思っていた増井氏とめぐり逢うことができることは、まったく「奇遇」の一言に尽きる。私の出身地を他人に説明するとき、決って「ホツキ貝」と「スルメイカ」を特産とし、その昔は日本一の生産量を誇ったセメント工場があり、全国でも珍しい男性のみの修道院が所在する町と自慢する。今もそんなふるさと上磯を故郷とする仲間との清々しいめぐり逢いを期待したい。

（埼玉県所沢市 在住）

「清川陣屋のことなど」

井上 豊

静岡に居住して三十年になろうとしている。三月の終りから四月初めにかけて、当地は桜が満開の季節である。伊豆半島を南から北に流れる狩野川べりの桜や、源頼朝ゆかりの三島大社の桜の美しさには目を奪われるが、それにつけてもこの季節になると思い出すのが故郷上磯の清川陣屋の桜である。満開は五月のゴールデンウィークの直後ぐらいではなかっただろう。最後の花見をしたのが高校時代の友人たちと一緒に時であったと記憶するから、三十四年くらい前のことになろう。それ以来清川陣屋に足を運んだことがない。

上磯小学校在学の時（昭和二四年―三〇年）、春の遠足は決まって桜の満開の清川陣屋であったことが、今となってはなつかしく思い出される。桜のもつ独特の華やかで妖艶な美しさを感じることができない幼さであったが、唯々貧しいから、おにぎりだけを持って遠足に行くことだけで楽しかったものである。

小学校二年の時、担任の阿部園子先生からクラス全員に板チョココレートの一片を貰って、この世にこんな甘くておいしいものがあるのかと、一種のカルチャーショックを受けたのもこの遠足の時である。清川陣屋はそういう意味で小学校時代の忘れられない思い出は当然であったろう。何キロぐらいたったのだろうか。桜のトンネル、周辺の新緑のまぶしさ、陣屋内が一時競輪場になったことなど、今当時の記憶がますます鮮明によりみかえってくるのは、単なるノスタルジアばかりでなく、自らの老いを意識する年令になったからであろうか。

秋の遠足は大沼公園。渡島大野から仁山信号所、そしてトンネルへとS
Lがあえぎながら黒煙を吐いて登っていく車窓の景観は今もよみがえって
くる。そしてトンネルを抜けると小沼の湖沼と、駒ヶ岳の雄姿が眼前に開
け、歓声をあげたものである。

多忙の生活のなかで、ふとこの季節、清川陣屋の桜のことに思いを馳せ
て、いつか再訪してみたいと願う昨今である。この稿を終えたころ、五十
四年ぶりの駒ヶ岳の噴火のニュースを聞いたのである。

(静岡県三島市 在住)

茂辺地川のサケよ集まれ

坂本 東洋志



昭和四十九年の秋、オラの大ファ
ンであった巨人軍長島選手の引退セ
レモニーをテレビで見てもなく、
日本サルベージ株式会社(サルベ
ージと言えば宝探しの会社と思うかも
しれないのではっきりさせておく。
遭難した船を救助する会社、海の救
急隊車と思つて下さい)本社転勤が発
令され、十月末日に二十八年間住み
馴れた北海道道南(茂辺地・函館)を飛び立った。今年で東京生活二十二

年目を迎えることになる。

この間、会社勤務の都合で三回転居し、現在は三鷹市井の頭公園(駅は
若者の街ジョージこと吉祥寺である)の近くに住んでいる。若い時は生ま
れ故郷の茂辺地を忘れたかのごとく、都会の生活にドップリつかって過こ
して来たが、馬齢を重ねることに何故か茂辺地矢不來天満宮の大祭、小・
中学校合同運動会、町内の野球大会など若き日の出来事や同級生を始め先
輩・後輩の昔のことを思い出さすようになって来た。

オラは何ごとも過去を振り返らずに前進あるのみの姿勢を持っているが、
この気持ちとは微妙に違うようである。

これが今まで全く考えもしなかった「郷愁」というものなのだろうか。オ
ラにも稚魚として放流された鮭が茂辺地の川に戻るといふような本能があ
るのだろうか。この本能はオラばかりでなく東京に出て来ている茂辺地の
仲間が全員持つており、昔の友達に会いたいと思つているのではないだろ
うか。

平成六年四月に無二の親友であるカクホン(家の屋号)のキンヤこと佐藤
金也(茂辺地の一年先輩)が愛知県瀬戸市のアイトー(株)本社(陶器関係)か
ら東京に転勤して来た。間もなくして金也の会社と関係のある函館出身の
鳥本玲子さんの紹介により八月一日の北海道道南会(函館市を中心に近郊
出身者の集い)に参加する機会に恵まれ二人でどの様な年齢層で、どの様
な身分(特に女性に興味があり)が集まっているのか不安と期待を胸に絵
がいて出掛けた。

出席者は八十名程度、オラたち二人が最年少で大半が函館出身者、上磯
出身は十人足らずと少なく、何となく疎外感もあった中で上磯出身の相馬
先生(東海大学名誉教授)が出席されておりまして、初対面、かつ年齢差
があるにも拘らず面白い話題で和やかな雰囲気を作ってくれたことに感激
し、オラたちのやるせない心境を訴え上磯会設立の音頭取りをお願いした
次第である。

それで、女性はどうだったか。遺愛、白百合、大妻、大谷の各女学
校卒業の往時のきれいどころが沢山います。話を合せてくれました。
相馬先生は速やかに上磯会設立準備に取り掛かり、平成七年二月二十五
日「発会式」、十月七日「第一回総会」と役員、幹事の協力を得て上磯会発足
にこぎつけてくれました。一方、平成八年六月十七日には白川 忠君(茂辺
地の二年後輩、企画・デザイン関係社長)の呼び掛けにより有楽町で茂辺地
の昭和二十年(二十四年生まれ)の男女二十数名が集まり「オマーだれだけ」
「オマーウチどこだったけ」から始まって延々と昔話に花を咲かせ、応援歌
「茂辺地の海にきたえたる……」を合唱し楽しい一時を過ごしました。

さあ、これからは大海から茂辺地のサケの雄と雌を出来るだけ沢山集め
て産卵のためなんとか茂辺地の鮭見橋までたどり着かせなければならぬ。
オラたちの茂辺地は函館山を一番格好良く眺められ、そしていろいろな海
産物が採れる海、サケの上るきれいな川、山菜の豊富な山があり、オラだ
ちのふる里として自慢できる自然に恵まれた所です。環境が良く、忘れる
事のできない茂辺地の小学校・中学校時代に勉強に励んだ(？)諸先輩及び
同僚並びに後輩諸君、一緒に力を合わせて茂辺地の川を上って見ようでは
ありませんか。

(東京都三鷹市 在住)



懇親会（平成7年10月）於・お茶の水 ホテル聚楽



故郷へ応援歌 送り続けよう

東京上磯会旗揚げ



創立を喜びあつた「東京上磯会」

首都圏在住の上磯町出身者の集まり「東京上磯会」の設立総会が二十五日、東京・千代田区のホテル聚楽で開かれた。これまで道内の八十市町村が「東京上磯会」を設立しており、「上磯会」は八十一番目。会場には約三千人余の上磯出身者が集まり、会の発足を喜び合った。

会長など役員を決める正式な総会手続きは今度ごろの予定で、今回は発会を祝う顔合わせの集い。

東京上磯会世話人代表の相馬正樹さん(左)は「東海人名誉教授、神奈川県選子市務所長の首頭で乾杯し、懇親会に。」「同郷の人が集まる、こういう機会を以前から待ち望んでいた」との声を聞かれ、会場のあちこちで話の輪が広がっていた。

北海道新聞 平成7年2月28日 道南版

古里しのぶ話の輪

東京上磯会が初の総会



総会に続いて、上磯町出身の横井哲郎(右)が東京上磯会の正式発足を祝って乾杯する出席者

北海道新聞
平成7年10月8日
道南版

東京やその近郊に住む上磯町出身者の集まり「東京上磯会」が正式に発足する。ことになり、第二回の総会と懇親会が七日、東京・神田に相馬正樹・東海大名誉教授を講師として開かれた。約百二十人が久しぶりの再会を喜び、親睦を深めた。

同会は、月に発会式を行ったが、今回の総会で会長に相馬正樹氏を選出することになった。相馬氏は「上磯町からは海老沢順三町長も駆けつけ、みなさんが東京で活躍されていて、心強いです」とあいさつした。

総会に続いて、上磯町出身の横井哲郎(右)が東京上磯会の正式発足を祝って乾杯する出席者

在任中が発足経過を報告、「サケが生まれた川に帰って来るように、ふるさとには私たちの郷愁を誘う。本音で語り合えるこの集いを大切に上磯の応援歌を歌い続けよう」と呼び掛けた。

また、地元上磯町から駆けつけた海老沢順三町長は「東京にいらつしやる皆さんが誇りに思える町づくりをしたい」とあいさつ。出席者には同町にあるトランプ・スト修道院で作られている特産バターなどがおみやげとして配られた。



懇親会 平成7年10月 於・お茶の水 ホテル聚楽

郷愁 三句

磯浜にハマナス咲いた 夢を見た
 久根の川 ガニがいるなら ハサミ出せ
 さくら さくら 清川陣屋のさくら

北州

祝 創立東京上磯会

光三次元工学

株式会社

テクノアーツ研究所

代表取締役 小田島 二郎

〒183 東京都府中市寿町三―一〇―七―三〇二

TEL・〇四二三(六二)九二〇一

FAX・〇四二三(六二)九二六一

ふるさとをよめる

山崎 保幸

当別、三ツ石の今冬は、寒さが厳しく雪の多い年です。一月下旬にはマインナス一五・五度を記録しました。

昨年は、八月の集中豪雨で一部被害がでるなど、あまり良い年ではなかったと思っておりますが、その時に地区の「助け合いチーム」と「町内会」が素早く対応し、連携しながら炊き出しや家財の整理など、地域住民のボランティア活動が展開されました。石別地区の良き伝統が、今も思っていることが証明されたと思っております。

十月には、石別町内会創立三十周年記念式典・祝賀会が盛大に開催されました。三十周年記念誌に、当別出身の中島利恵子(菊池)さんより「ふるさとを想う」を寄稿していただき、中島さんのふるさとの哀愁と東京上磯会の活動のお話などで、楽しい一日でした。

今年一月には、当別地区に老人デイサービスセンターが開所され、高齢化社会に対応できるサービスが当地域でも展開されることとなります。これがホットなニュースです。

(おしまコロニー明星園長 当別在住)



桐沢 一磨

「上磯会に行ってきたよ。とっても楽しかった。つきない話でいっぱいだった」。少々興奮気味の声を受話器を通して報告されてきた。私の妹(橘君子)である。話は延々と続く。電話料金が高つくのにと、心配しながらである。やれやれ終わった。すると、五、六分もたったのだろうか、友人の佐藤昭作氏からだ。「集まった人を紹介されても分からなかったが、同郷のよしみというか、よかったなあ」と、これまた延々と続く。

東京上磯会に多くの方が集まったことを知り、感慨ひとしおの思いがする。「ふるさととは遠きにあつて思うもの」という感傷的な気持ちにとらわれたことのない私だが、他郷の人たちの心情は、計り知れないノスタルジアがあるのだろうと思う。郷土を同じくするという共通の環境が、ふるさとを語り合う共通の場として、東京上磯会が末永く盛会されることを祈念してやまない。

今年の冬、北海道はものすごい雪。上磯もその例外ではない。上磯はどこから春がくるのだろうか。素朴に思う昨今である。

(前上磯町建設部長 飯生町在住)

小泉 志津子

住んでいながら「上磯」という言葉を耳にするたびに、なつかしく感じとる年令になりました。上磯で生まれ育ち、現在は人と人との心の通じあう地元での生活、地域活動の中から楽しさを見出し、充実した毎日をお過ごしております。

昨年の東京上磯会には、多くの方が集まり、なつかしい郷里のお話でつきなかつたとの事。発足にあたり、若いも若きも出会いの場、明るい輪の一步を踏み出した素晴らしいものがあつたのではと、想像いたしました。

私の上磯中学校の同期生が経営する麻布鳥居坂下、居酒屋「はじめ」。テレビ、週刊誌でお馴染みの得意料理の一つには、「上磯風ケンチン汁」があります。私も上京の折に立ち寄りますと、お店には同郷のお客様がいらつしやいます。時間のたつのも忘れ、話に花が咲き、仲間が集うことにより東京の一層の楽しさを背にしながら帰ってきます。

今後、会員の皆様の御活躍と御発展を心からお祈り申し上げます。

(上磯町会連合会婦人部長 東浜町在住)

東京上磯会を想う

藤田 正吉

故郷は遠きに在りて思うもの……

「広報上磯・夢追い人」に、東京上磯会初代会長・相馬正樹さんのプロフィールに目を通す。「永く他郷にあつてこそ……」。都会のコンプレックスも上磯弁で気持ちをはり着かせ、「故郷なつかしいね」との一言。頁をめくり、東京上磯会創立を思い浮かべる。

一五〇人あまりの出席者、新聞広告を見ての参加は涙ありだったとか……。写真を通じての方々の顔やお名前は定かではありませんが、相馬会長さん、海老沢町長さんだけは確認できまして、会の和やかさが私の心にも伝わってきました。

会の初めは函館出身者が多く、大変な苦勞をなさつての「実り」。この集いで今後一層の絆の強まることを祈願する一人です。

さて、現在の上磯町は「だれもが住みよいまち」をめざし、思い出多いセメント工場の鈍音が響くなかで、運動公園（仮称）や上磯町文化センターの建設、さらに「夏まつり」や雪の祭典が盛り上がりを見せているなど、町づくりも成果を上げ、その評価も高いところです。「百聞は一見にしかず」とか……。機会がありましたら、是非ご来遊くださることを懇願いたしております。
（久根別グリーン町会・前会長 久根別在住）

慰問袋の奇縁

……五十年目の往復切符……

長崎 ふくゑ

その昔（五十年前）、私は旧役場庁舎に職員として勤めておりました。世はまさに戦争時代とあつて、上磯町より出征された軍人さんに慰問袋、慰問文を出すことが一つの義務でもあり励みでもあつたのです。庁内の書庫に慰問袋の保管場所があり、多くの白い袋が積み重ねられて戦地に発送されていたのを未だに覚えております。

当時、私が出した慰問袋はどこに届けられたのか返事のないことが当然の「片道切符」の時代だったのです。人生八十年の世の中の移り変わりとともに、往年の乙女も白髪頭に変じ、そして何回目かの年女を迎えた今年の元旦の朝、受け取った年賀の中に東京上磯会の小田島二郎さんの名がありました。

「五十年前に慰問袋を戴いた方でしたら感激です……」と書かれたお年賀



旧町役場庁舎

でした。聞けば私の慰問袋が偶然にも、当時満州の戦線に出征しておられた小田島さんの手に渡っていたとのこと。どこに送られて行くか、誰の手に渡るかも知れない慰問袋が、同じ上磯の出身者が中国で受け取るのほまさに奇跡的なことです。私自身、その時に書いた慰問文の言葉さえ忘れていて、思い出しもしなかったのに、元旦早々の「往復切符」を手にし、感慨無量の一時でした。

暖かいお年賀をお送りくださった小田島さん、本当にありがとうございます。



花火大会

東京上磯会の会報発刊おめでとうございます。会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。さて、私は町の商工観光行政の担当者として、今の上磯を代表する二つのイベントをご紹介します。まず、「上磯町夏まつり」は、八月十四、十五日の二日間開かれる上磯の夏の彩る最大の「まつり」になっています。色とりどりに飾られた山車行列や花火大会がメインで、その他にもほっき貝などの産直市場も開かれます。また、毎年十一月三日に開かれている「上磯町さけまつり」は、今年で十五回を数えることになり、記念事業として、二日間の日程で明治時代にサケの放流事業が始まった茂辺地川を会場に、サケのつかみどりや即売会などを計画しています。

まだ他にも紹介したいことがたくさんありますが、現在の上磯町は、先人が築いてきた輝かしい歴史や文化遺産を受け継ぎ、豊かな町づくりに努めています。皆様も機会がありましたら、ぜひご来町いただきたいと思えます。

(商工観光係長 茂辺地在住)

中川 正三郎



さけまつり



夏まつり



30年、青春・こころ・味

株式会社 豊実企業

新宿区歌舞伎町2-19-3 ホウジツビル 〒160

Tel.03(3205)0067 Fax.03(3205)00415

北海道の味を伝えて30年、

ホウジツグループ各店、真心こめてお迎え致します。

活魚割烹 道産子 歌舞伎町本店	TEL.03(3209)7110	多国籍料理 たらふく 吉祥寺店	TEL.0422(21)0007
大衆割烹 道産子 新宿西口店	TEL.03(3342)2958	東京 ベんとうや本舗 吉祥寺店	TEL.0422(22)8781
海鮮市場 道産子 新宿二丁目店	TEL.03(5379)5499	カラオケパブ なんじゃ Part. I	TEL.03(3476)3324
海鮮市場 小さな築地 吉祥寺店	TEL.0422(21)4449	もんじゃ Part. II	TEL.03(3477)0073
海鮮市場 旬 飯田橋店	TEL.03(3235)2160		

土木一式・設計施工

一般土木・道路舗装・上下水道・宅地造成工事



株式会社 共栄工業

代表取締役 會 澤 等

東京都指定水道工事店

〒203 東京都東久留米市幸町1-5-34

TEL.(0424) 74-1211(代)

皆様の御愛顧をもちまして20周年を迎えることが出来ました。

今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

山海料理 みちのく

代表取締役 井 熊 松 一
店 長 井 熊 正

有楽町店 ☎03-3561-5336

渋谷店 ☎03-3407-8618

浅草橋店 ☎03-3866-1850

事務局だより

業 務 報 告

1. 東京上磯会の発会式は昨年2月25日、御茶の水のホテル聚楽で開催されました。参加者136名で、上磯からは町長さんをはじめ4名の方に加えて来賓6名が出席され、町や地元から手土産をいただき盛会裡に終わりました。
2. 第1回目の総会は、10月7日に同じ会場において開催されました。出席者は126名で海老沢町長もご出席になり、承認された会則にしたがって正式に東京上磯会が発足し、運営されることになりました。
3. 総会において承認された役員ならびに幹事は、次の通りです。

会 長	相 馬 正 樹	幹 事	浅 部 敏 彦	幹 事	佐 藤 金 也
副 会 長	小 田 島 二 郎	"	阿 部 真 喜 子	"	相 馬 滋
"	郷 内 繁	"	嵐 良 司	"	染 木 ト シ
事 務 局 長	高 橋 昌 三	"	石 塚 美 耶 子	"	福 原 和 子
会 計	平 野 富 久 子	"	加 藤 和 子	"	福 原 孝 久
会 計 監 査	宮 崎 紀 夫	"	小 松 二 郎	"	横 井 哲 郎
		"	坂 本 東 洋 志	"	黒 田 博
				"	山 下 勇 吉

連 絡 事 項

1. 年間行事予定を周知するための会報が今回ようやく発行の運びとなりましたので、アンケートに対する回答により順次実施する予定にしております。(回答用葉書使用)
2. 昨年、会則による会員になることを希望する方に会費の納入をお願い致しましたが、振り込みの実績は28%程度に過ぎませんでした。会の円滑な運営のために、会費の納入に御協力をお願い致します。(別紙振替用紙使用)
3. 会費の納入者には最新版の在住者名簿(650名)をお届けします。別途会員名簿の発行を計画しておりますので、会費振り込みの際に用紙に必要な事項を記入してください。
4. 会の発展は会員数を増やす以外に道はありません。会員の掘り起こしに対して積極的な御協力をお願いします。
5. 本年度会費未納の方は2年度分をまとめて納入してください。

会費納入状況報告

区 分	在住者数	会費納入者数	百分率
旧上磯地区	518名	157名	30.3%
上磯小学校		92名	
谷川小学校		30名	
浜分小学校		23名	
義朗小学校		5名	
沖川小学校		4名	
その他		3名	
茂辺地地区	36名	8名	22.2%
当 別 地 区	82名	13名	15.8%
計	636名	178名	27.9%

後記



小田島 二郎

です。

ようやく会報第一号の発行にこぎつけることができました。役場の種田さんや関係各位の御協力の賜物です。ここに改めて感謝の辞を申し述べさせていただきます。それにしても、こんなに多くの方々が上磯から東京方面に來られていたのは、この会に携わってみて初めて知り、いささか驚いているところ

さて私たち東京上磯会の人々にとってふる里とは何だろうか：なんて今更
大上段にふりかぶって議論するつもりはないが、それぞれはふる里を離れて何十年もたっている人が多い。かくいう私も五十年になろうとしているが、いま改めて思い出すふる里のイメージとは、青少年時代の友であり、川であり、山野であり、そして海である。

そのふる里の自然の姿こそ、時には力づけになり、時には涙して思う存在なのである。言うなれば、いつも私たちの心を惹きつけて止まないものである。

だが、変わりゆく時代とともに海も川も山も昔のイメージから遠くなくなっていくように思われて淋しい。それが文化であり世の近代化への代償であるとするならば悲しいことである。

私たちにとってふる里とは、いつも昔のような豊かな自然のままの姿であって欲しいと思うのが贅沢なのかも知れない。

ともあれ、上磯の発展を東京上磯会の会員一同挙ってお祈りし、そして応援歌とします。

(東京上磯会 副会長 東京都日野市在住)

総会・懇親会の御案内

第2回総会ならびに懇親会を下記の通り開催致しますので、万障お繰合わせ友人・知己をお誘い合わせの上御出席下さるよう御案内申し上げます。

記

日時 平成8年10月19日(土) 午後2時より5時まで
会場 日本閣 東中野店 ☎03-3367-2222
JR東中野駅下車 東口改札口を出て左降口階段すぐ前
会費 8,000円

年会費未納の方は、当日会費に追加納入してください。

町からの御土産ならびに抽選会、町出身の歌手、芸能人のアトラクションなど盛り沢山のプログラムが用意されております。

同封の回答用葉書で出欠の可否をお知らせ下さい。



お願い

A.回答用葉書の連絡事項欄で、下記についてお答えください。

1.希望する本会の行事

会員の親睦旅行、ふるさと訪問旅行、お花見、ハイキング、ゴルフその他サークル活動などの希望する行事。

2.会に対する要望事項

B.会報に投稿を希望される方や広告を掲載したい方は原稿をお送りください。

1.広告掲載料はB-5版1/4ページ5,000円程度を目安しております。

2.原稿字数は800字位に纏めてください。

会員を紹介してください！

会の発展は会員数を増やす以外に道はありません。
会員の掘り起こしに積極的な御協力をお願いします。

第一回東京上磯会
会報創刊号
磯の香